

令和 7 年度 全国学力学習状況調査

= 紀宝町結果概要と分析 =

令和7年9月3日

紀宝町教育委員会

目次

～はじめに～

1. 令和 7 年度各教科の正答率と無解答率の結果より(1P～2P)

(1)4年間の平均正答率の変化

(2)みえスタディチェックと学力学習状況調査の関係

2. 紀宝町全体における成果と課題の特徴(3P～8P)

(1)小学校国語

(2)中学校国語

(3)小学校算数

(4)中学校数学

(5)小学校理科

(6)中学校理科

①成果のあった領域または向上した領域

②不注意による誤答や比較的克服が容易な課題

③難易度の高かった課題等について

3. 学校質問紙・生徒質問紙より(9P～12P)

小学校

(1)ウェルビーイングの視点から～おもに学校教育全般において～

(2)ウェルビーイングの視点から～おもに授業において～

中学校

(1)ウェルビーイングの視点から～おもに学校教育全般において～

(2)ウェルビーイングの視点から～おもに授業において～

4. 紀宝町の成果と課題(13P～17P)

学校・家庭・地域が連携した「地域とともに学ぶ」学校を視点とした、
教育委員会がこれからも大切にしたいこと

(1)授業実践について

(2)教職員の研修(学校と教委の連携)

(3)学校と地域の連携

(4)学校と家庭の連携

(5)学校・家庭・地域の連携

(6)家庭と教委の連携

～はじめに～ 児童・生徒・保護者の皆様へ

①全国学力学習状況調査～実施にあたっての変化～

※ 今年度より中学校理科で IRT に基づく調査が行われました。IRT とは、「項目反応理論」といい、児童・生徒の正答・誤答が問題の特性(難易度、測定精度)によるのか、児童・生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童・生徒の学力スコアを測定する統計理論です。(例:正答数で判断する学力スコア→難易度や測定精度も含めた学力スコアへ)

児童・生徒は全問、タブレットで解答。理科においては全国平均値500Pを基準に平均 IRT スコアとして表示されています。また、IRT は A 全員が同じ問題をおこなう(6 問)、B 実施日によって問題が振り分けられる(4 問)、C 非公開の問題(16 問)の構成となっており、そのため、あらかじめ解答しない問題については、個人票の結果が空欄となっています。IRT 調査を行うことで以下のことが可能になりました。

①調査日の複数設定が可能になる。各児童・生徒が異なる問題を受けることができ、テストの結果を互いに比較できる。

②今まで以上に多くの問題に接し、幅広い領域、内容等での調査が可能になる。

今回、個人の調査結果は「IRT バンド」という示され方が用いられています。例えば、生徒一人一人の結果は、5 段階で示され、「5」が最も高く、「IRT バンド」「3」が示されている人は、「問題の難易度が「3」の問題をおおよそ80%の確率で正答する力があると推定できます。どの問題もこれまで授業で学んだことを活かして取り組むことができ、「IRT バンド」が「3」の人でも難易度が「4」や「5」の問題に正答する場合もあり、IRT バンドが「5」であっても難易度が「2」の問題を間違える場合があります。

R8 年度の全国学力学習状況調査(以下学調と表記)では英語が実施予定であり IRT に基づく調査が実施されます。R9年度には国語・算数・数学において IRT による調査が実施されます。

高校入試問題や大学入試問題においても学調のように問題を正確に読み取り、多角的に理解・判断し正しく表現する力、そして応用する力が問われるため、「どのように自身が考え、どこが正解していて、どこが間違っていたのか、こういった力がこれから必要なのか」を繰り返し理論的に深めていく必要があります。

調査結果に載っている問題は国立教育政策研究所のホームページに掲載されています。できた問題や間違えてしまった問題をぜひ振り返ってみてください。

②ウェルビーイング(健康、幸福な状況)の視点

三重県では目指す教育目標32の1番目にウェルビーイング(健康・幸福度)を挙げています。今回児童・生徒質問紙の内容から、幸福感、つながり、協働性、利他性、多様性、社会貢献、自己肯定感、自己実現、健康に関わる項目を要素化し、ウェルビーイングの指標として県が示す基準を町も取り入れ表示しました。ウェルビーイングと学調結果との関連性については、一定の特徴が見られるかどうか今後も分析してまいりたいと考えます。

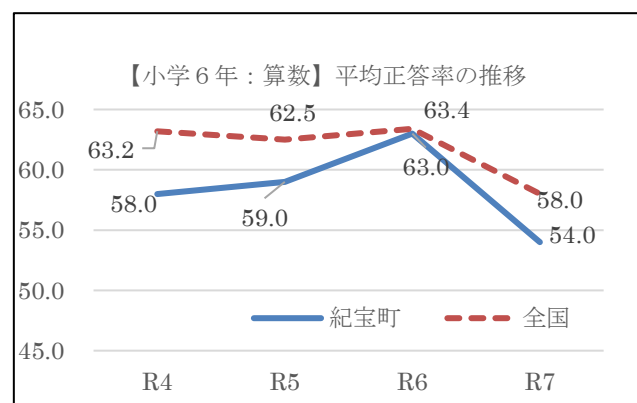
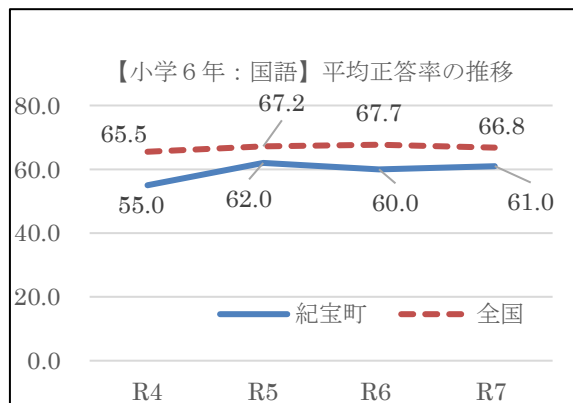
紀宝町では海、山、川の自然に囲まれた環境の中で地域の人材力に支えられながら、「地域とともに学ぶ」実践が授業の中で子どもたちの「学び」の深さにつながっています。「学び」とウェルビーイングが一体化する「生きる力」を身につけることが目指す目標であり、学調の結果という一つの指標によって現在地を計り、未来への学び方を考え、工夫を重ねていくことが大切であると考えます。

1. 令和7年度全国学力・学習状況調査における正答率無解答率の結果から

右表のとおり、小学校では全体的に全国の平均正答率より3%から5%下回る結果となりました。

しかし、下図のように国語・算数を4年間の経年変化で見ると本年度全国の平均正答率が前年度を下回ったものの紀宝町では、国語において前年度より平均正答率は上回っており、算数においては、全国同様平均正答率は下がりましたが、平均無解答率が2%台と大変低く、難易度(各年度の難易度で平均正答率も差が出る)の高い問題にもよくチャレンジしたことがわかります。

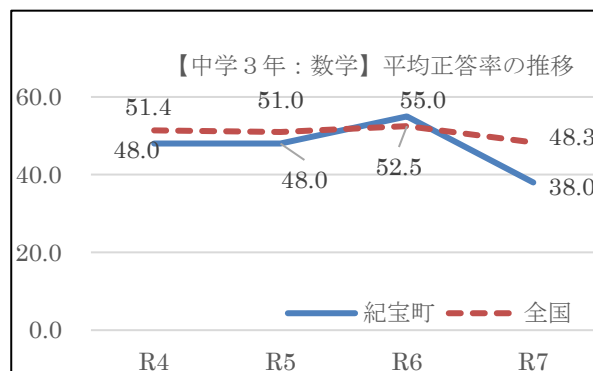
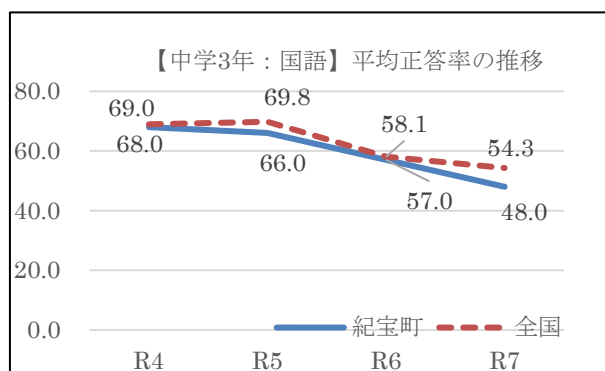
R7 年度	小学 6 年生		
	国語	算数	理科
紀宝町	61%	54%	54%
三重県	66%	57%	56%
全 国	66.8%	58%	57.1%
平均無解答率 (紀宝町)	2.2%	2.3%	2.9%
平均無解答率 (全国)	3.6%	3.6%	2.8%



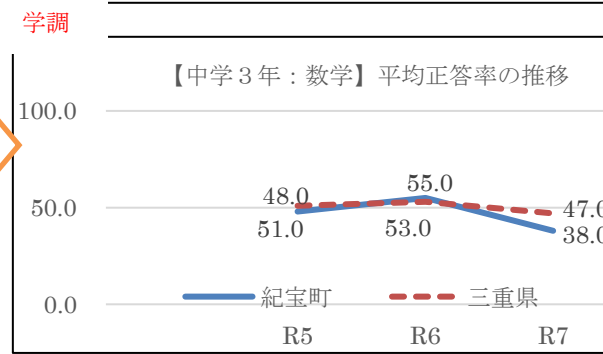
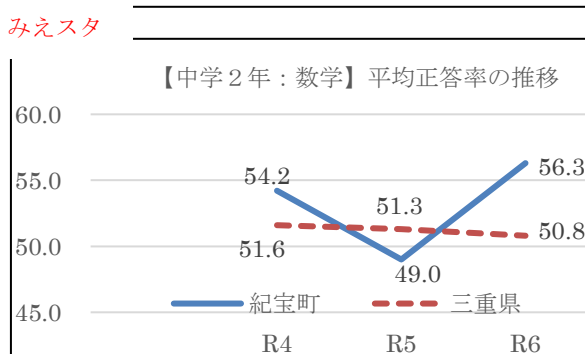
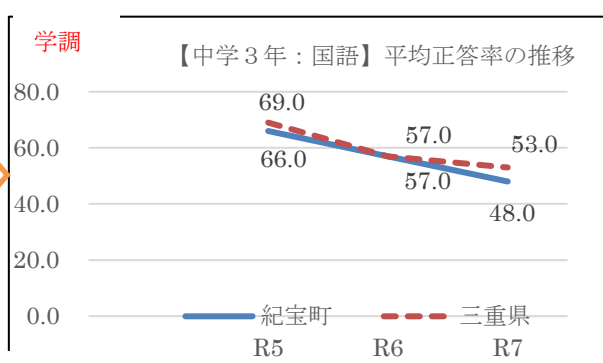
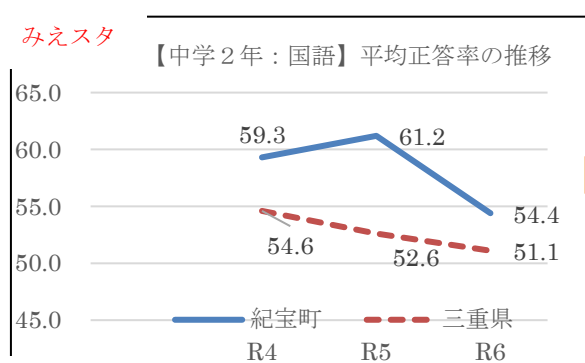
一方、本年度中学校では、全国平均正答率が過去3年間と比較して大幅に下がりました。国語においてはここ数年で60%後半台から50%台へと10%以上下がり、数学においても本年度は50%を割るという結果でした。

これまで紀宝町では「難しいと思える問題に出会ったとしても、最後まであきらめず取り組もう」という指導を継続・徹底して結果につなげてきましたが、今年度の中学校においては「難易度・測定精度が、ある一定レベルの高さになると右図のように全国や県に比べて極端に平均正答率が下がってしまう」ことがわかりました。

R7 年度	中学 3 年生		
	国語	数学	理科
紀宝町	48%	38%	※475p
三重県	53%	47%	※498P
全 国	54.3%	48.3%	※503P
平均無解答率 (紀宝町)	9.8%	13.8%	
平均無解答率 (全国)	6.7%	10.6%	



このことはみえスタディチェック(以下みえスタディ)においても見られ、下図のように県全体でみるとみえスタディと学調の平均正答率は比例しているように見えますが、紀宝町においてはみえスタディの平均正答率が県の平均正答率を上回っていても学調では全国・県の平均正答率を下回る傾向があるといえます。(難易度、母体数の影響等)



※R4年、4月実施みえスタ→R5、4月実施学調は同一学年です。右表は左表から1年後に移動して表示しています。

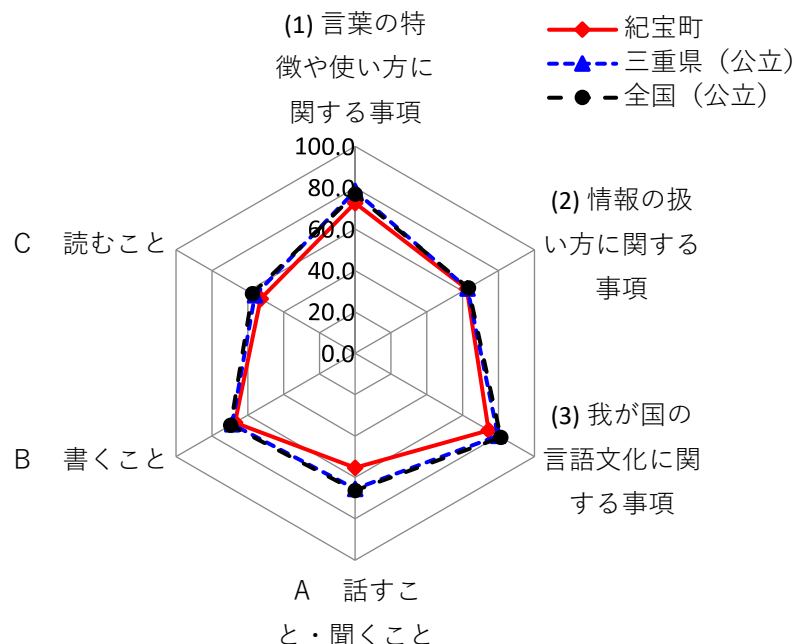
知識・技能を問う問題であっても繰り返し問題に触れること、「なぜそうなるのか」を理解し言葉で表現できることでより確実に正答できるようになります。

また、難易度の高い問題であっても自ら熟考し、自己の考えとは違った観点からアプローチする仲間の考えを聴き、協働しながら学びを深めていくこと、そして仲間との学び合いによる喜びをさらなる自己の工夫につなげることで、「より質が高く洗練された学びへと高まる」と考察します。

2. (1) 正答率からみる成果と課題 その特徴 ～学習指導要領の観点から～ 小学校国語

(1) 紀宝町全体でみる成果と課題

これまで課題であった「書くこと」の領域では、正答率が上がりました。また「情報の扱い方に関する事項」についても全国値と差が見られず、日頃の学習の成果が表れているといえます。「言葉の特徴や使い方に関する事項(漢字の書き取り等)」と「我が国の言語文化に関する事項」「読むこと」は学校間で正答率の結果が分かれました。「話すこと・聞くこと」については、引き続き課題が見られました。



①思考・判断・表現における「書く事」の領域について(成果・改善)

2二「図表などを用いて自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫できる」

短答式問題(県比+0.7、全国比-1.3)

2三「目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる」

記述式問題(県比-1.6、全国比-0.3)

②思考・判断・表現における「読むこと」の領域について(改善)

3三(2)「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができる」記述式問題(県比-0.1、全国比-1.4)

③不注意による誤答や比較的克服が容易な問題(課題)

2 四イ「【ちらし】下線部イを、漢字を使って書き直す(あつい日)」(県比-9.9 全国比-8.7)

☞ 学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができる。

④思考・判断・表現「話すこと・聞くこと」における問題(課題)

1一「【話し合いの様子】における小森さんの傍線部の発言を説明したものとして適切なものを選択する」(県比-14.4 全国比-15.5)

☞ 目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができる。

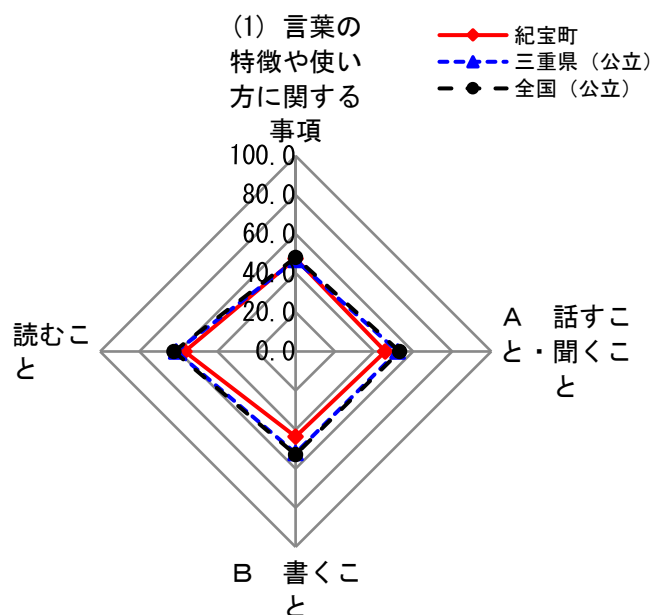
1三(2)「【インタビューの様子の一部】で小森さんが傍線部イのように発言した理由として適切なものを選択する」(県比-10.1 全国比-11.5)

☞ 話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができる。

2. (2) 正答率からみる成果と課題 その特徴 ～学習指導要領の観点から～ 中学校国語

(1) 紀宝町全体でみる成果と課題

知識・技能分野の「言葉の特徴や使い
方に関する事」についての領域では、
よく正答しており、県の正答率を上回
っています。ただし思考・判断・表現分
野の「読むこと」「話すこと・聞くこと」
「書くこと」において平均正答率は県・
全国比で－5％～－8％であり、特に
「書くこと」について課題があります。
生徒質問紙では「国語の授業で文章を
読みその文章の構成や展開にどのよう
な効果があるのかについて根拠を明確
に考えていますか」では、78.8%の人



が「当てはまる」「大体当てはまる」と回答(県比+5.2 全国比+4.8)しましたが、「国語
の授業で文章を書いた後に読み手の立場に立って読み返し、語句の選び方や使い方、
文の段落の長さ語順などが適切かどうかを確かめて文章を整えていますか」では、
67.7%(県比-5.3、全国比-6.0)が「当てはまる」「大体当てはまる」であり「当てはま
らない」「大体当てはまらない」が 31.3%(県比+5.3%、全国比+6.1)でした。「理解
はできる。自身の頭の中で文章もできている。しかし、実際に読み手からは、内容が伝
わらない文章になっていることが課題として考えられます。

①「書くこと」の領域において「理解できていること」(成果)

1二「ちらしに「会場図」を加えた目的を説明したものとして適切なものを選択する」

☞ 目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる

(県比+5.3、全国比+4.7)

②思考・判断・表現分野の「読むこと」「書くこと」に関して「理解はできているが、実際 にどう整理して文章にするか」(課題)

3四「『一 榎木の実』に書かれている場面が、『二 釣の話』には書かれていないことによ
る効果について、自分の考えとそのように考えた理由を書く」(記述式)

☞ 文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えることができる

(県比-7.0、全国比-8.1、無解答率県比+15.9、全国比+15.5)

4「手紙の下書きを見直し、誤って書かれている漢字を見付けて修正する」(短答式)

☞ 読み手の立場に立って、表記を確かめて、文章を整えることができる

(県比-15.9、全国比-18.8、無解答率県比+18.0、全国比+19.1)

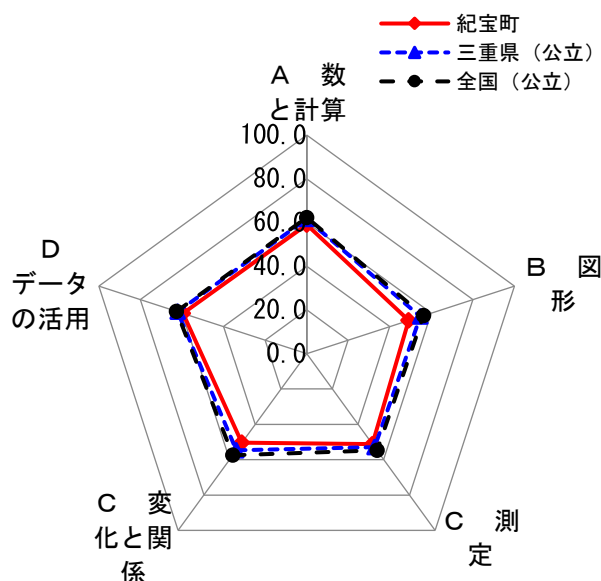
2. (3) 正答率からみる成果と課題 その特徴 ～学習指導要領の観点から～ 小学校算数

(1) 紀宝町全体でみる成果と課題

「数と計算」の領域ではよく理解している問題(県・全国正答率を上回った)がいくつかみられました。データの活用、変化と関係、測定については取組の向上が見られるものの、これらの領域が複合的に出された問題については課題を残しました。

また、図形については依然課題は残すものの図形の性質や意味を理解しているかの問題や図形における角の大きさを求める問題について正答に近い解答が見られます。

「変化と関係」においては全国における正答率が低い問題についてほぼ変わらない正答率であり、県正答率を上回っていることや誤答ではあるけれど正答に近い解答が見られます。算数における学校での学び、子どもたちの学力が着実に伸びていると分析します。



①「数と計算」における平均正答率が高めの問題は、みんなが問題に向き合い、それ以上に高い正答率を出している。(成果)

1(1)「2022年の全国のブロッコリーの出荷量が2002年の全国のブロッコリーの出荷量の約何倍かを、棒グラフから読み取って選ぶ」

(県比+3.5、全国比+4.2、無解答率県比 0%)

☞棒グラフから、項目間の関係を読み取ることができる。

3(4)「 $1 \div 2 + 1 \div 3$ を計算する」

(県比+3.8、全国比+4.1、無解答率県比-2.4、全国比-2.9%)

②「変化と関係」において全国的に正答率が低い問題においても県の正答率を超えている。(成果)

4(4)「10%増量した詰め替え用のハンドソープの内容量が、増量前の何倍かを選ぶ」

(県比+1.5、全国比-1.9、無解答率県比-0.5、全国比-0.4%)

☞「10%増量」の意味を解釈し、「増量後の量」が「増量前の量」の何倍になっているかを表すことができる

③図形における問題(課題)

2(1)「示された平行四辺形をかくために、コンパスの開く長さを書き、コンパスの針を刺す場所を選ぶ」

(県比-11.4、全国比-9.5、無解答 0%)

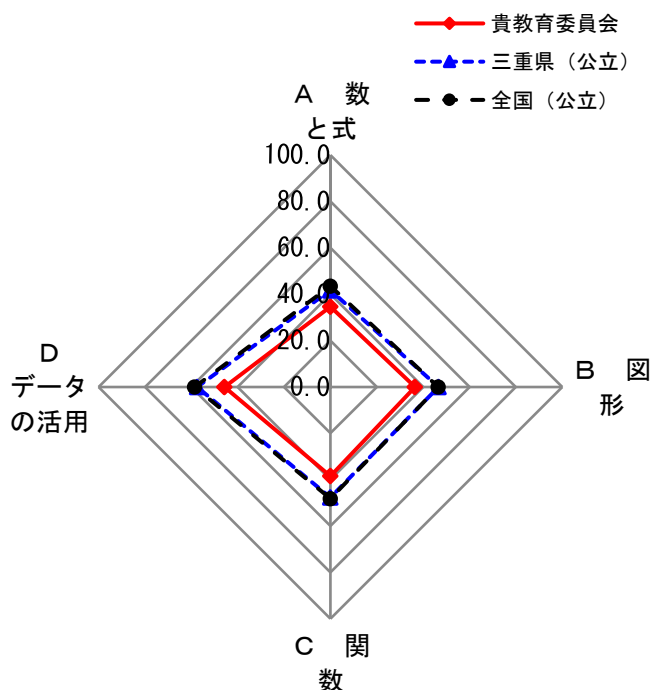
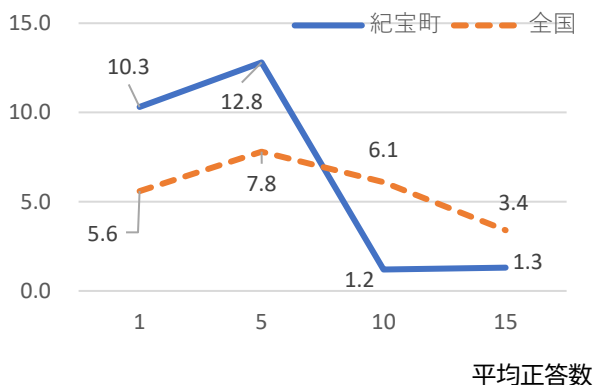
2. (4) 正答率からみる成果と課題 その特徴 ～学習指導要領の観点から～ 中学校数学

(1) 紀宝町全体でみる成果と課題

全国で平均正答率が70%を超えた問題が15問中2問。60%を超えた問題が15問中1問。50%台が4問。20%～40%台の平均正答率の問題が残り8問という大変難易度の高い問題でした。

しかし、全国平均正答率が70%を超える「確率の問題」では、県・全国の平均正答率を上回り、「関数の問題」でも(県比-1.4%)粘り強く取り組みました。

% 【中学3年：数学】 平均正答数の割合



「数と式」の領域では問題の言葉の意味を正確にとらえることによって正答に導かれる問題がいくつか出されましたが、誤答が多い傾向があり、平均正答数の5問以下の割合が高くなりました。

①言葉の意味を正確に把握して大きく正答率を伸ばした問題、意味が理解しきれなくて大幅に下回った問題(成果と課題)

1. 「1から9までの数の中から素数を全て選ぶ」

(県比+10.7、全国比+5.4、無解答0%)

5. 「ある学級の生徒40人のハンドボール投げの記録をまとめた度数分布表から、20m以上25m未満の階級の相対度数を求める」(県比-28.1、全国比-29.7、無解答0%)

②平均正答率70%台の問題(成果)

7(1) 「Aの手元のカードが3枚とも「グー」、Bの手元のカードが3枚とも「チョキ」でじゃんけんカードゲームの1回目を行うとき、1回目にAが勝つ確率を書く」

必ず起こる事柄の確率について理解しているかどうかをみる

(県比+2.2、全国比+2.1、無解答県・全国比ともに-0.8%)

③不注意による誤答や比較的克服が容易な問題(課題)

2. 「果汁40%の飲み物amLに含まれる果汁の量を、aを用いた式で表す」

3. 「△ABCにおいて、∠Aの大きさが50°のときの頂点Aにおける外角の大きさを求める」

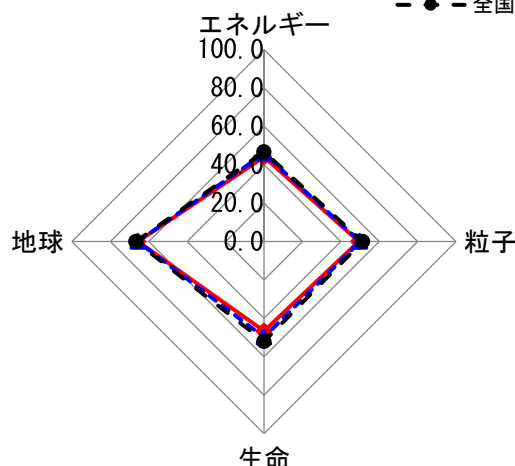
4. 「一次関数 $y = 6x + 5$ について、xの増加量が2のときのyの増加量を求める」

2. (5) 正答率からみる成果と課題 その特徴 ～学習指導要領の観点から～ 小学校理科

● 貴教育委員会
▲ 三重県（公立）
● 全国（公立）

(1) 紀宝町全体でみる成果と課題

全体的には「生命」を柱とする領域が県全国平均正答率を若干下回っていますが、「エネルギー」「地球」「粒子」を柱とする領域においては県・全国平均正答率と同レベルであり、「生命」の領域も含め、すべての領域でよく正答に結び付けました。そして思考・判断・表現分野では、記述する問題で正答に結び付けています。これまでの取組の成果が見られた結果と分析します。



① 正答率の高かった各領域について(成果)

2(2)「電気を通す物と通さない物でできた人形について、人形Aの剣を人形Bに当てたときだけ、ベルが鳴る回路を選ぶ」(県比+3.8、全国比+1.5、無解答率 0%)

☞ 電気の回路のつくり方について、実験の方法を発想し、表現することができる(エネルギーを柱とする領域)

4(2)エオ「水の結露について、温度によって水の状態が変化するという知識と関連付け、適切に説明しているものを選ぶ」(県比+9.9、全国比+6.7、無解答率 0%)

☞ 水の結露について、温度によって水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解している(粒子を柱とする領域)

3(2)「ヘチマの花粉を顕微鏡で観察するとき、適切な像にするための顕微鏡の操作を選ぶ」(県比+4.7、全国比+3.8、無解答率 0%)

☞ 顕微鏡を操作し、適切な像にするための技能が身に付いている(生命を柱とする領域)

1(2)「赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いをまとめたわけについて、結果を用いて書く」(県比+2.1、全国比+3.7、無解答率県比-2.1、全国比-2.3%)

☞ 赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現することができる(地球を柱とする領域:記述式)

③ 不注意による誤答や比較的克服が容易な問題(課題)

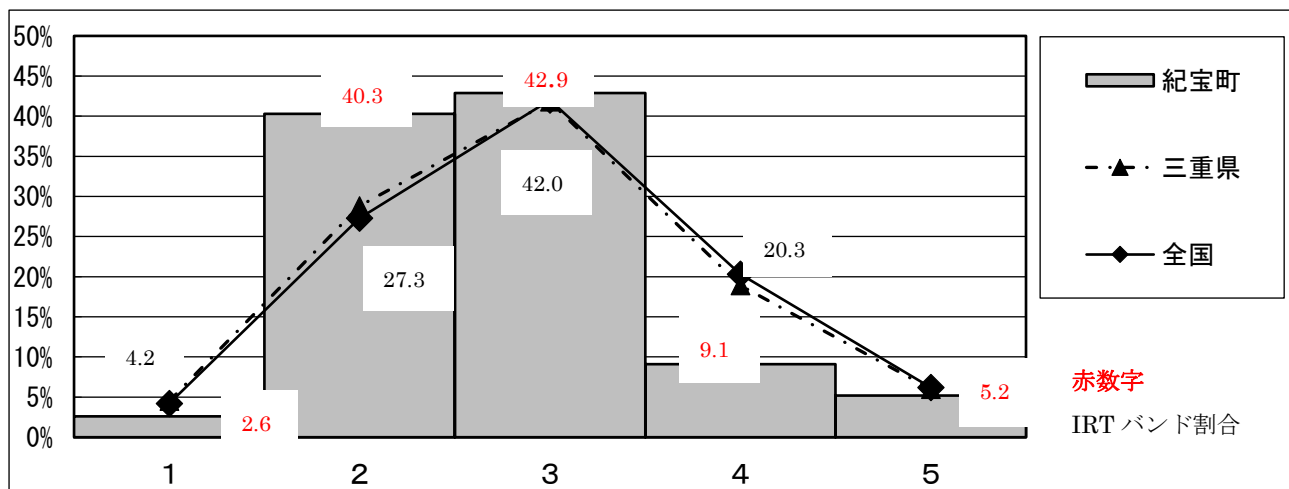
3(3)「ヘチマの種子が発芽する条件を調べる実験において、条件を制御した解決の方法を選ぶ」(県比-11.7、全国比-16.3、無解答率県比+1.2、全国比+0.8%)

☞ 発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができる(生命を柱とする領域:選択式)

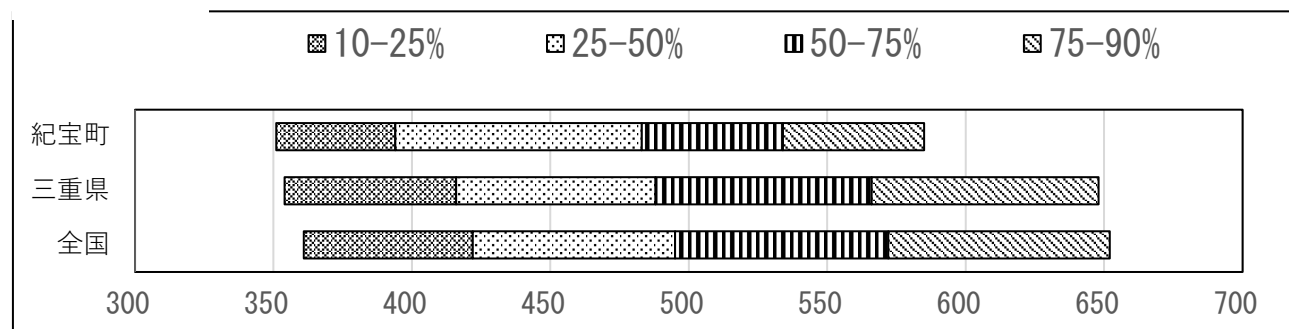
4(1)「水の温まり方について、問題に対するまとめを言うために、調べる必要があることについて書く」(県比-14.0、全国比-12.3、無解答率県比-0.6、全国比-1.2%)

☞ 水の温まり方について、問題に対するまとめを導きだす際、解決するための観察、実験の方法が適切であったかを検討し、表現することができる(粒子を柱とする領域:短答式)

2. (6) 正答率からみる成果と課題 その特徴 ～学習指導要領の観点から～ 中学校理科



IRT スコアー



比較的正答率が60%～70%の問題は県全国と比較しても正答率が高いまたは同レベルでしたが、50%以下の正答率の問題は下回っている問題が多かったです。したがってその結果、IRT スコアー(学年データ)、IRT バンド(個人別データ)においても県、全国を下回る結果となっています。

①成果が見られた問題(成果)

1(3)「地層1から地層4までの性質から、水が染み出る場所を判断し、その場所を選択する」(地球を柱とする領域)(県比+4.3、全国比+2.8%)

☞ 露頭のどの位置から水が染み出るかを観察する場面において、小学校で学習した知識を基に、地層に関する知識及び技能を関連付けて、地層を構成する粒の大きさとすき間の生物1から生物4までの動画を見て、呼吸を行う生物をすべて選択する

1(4)「大きさに着目して分析して解釈できるかどうかをみる」(生命を柱とする領域)(県比+0.2、全国比+1.5%)

☞ 水の中の生物を観察する場面において、呼吸を行う生物について問うことで、生命を維持する働きに関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる

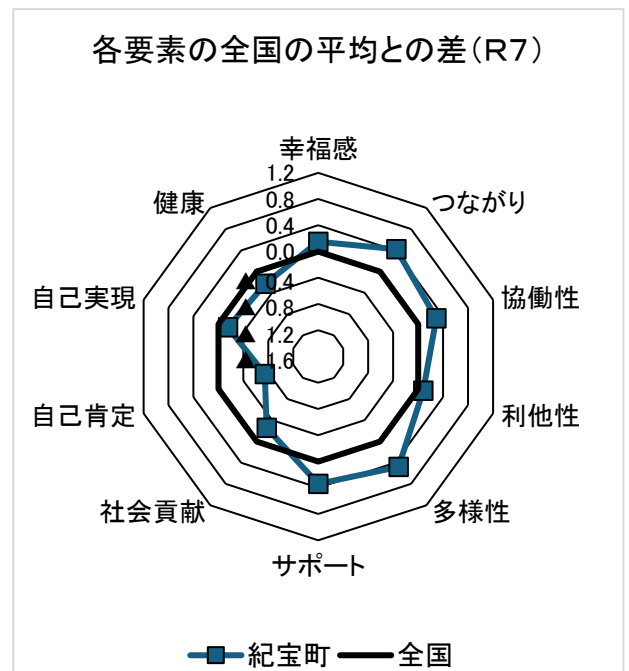
②不注意による誤答や比較的克服が容易な問題(課題)

(5)「塩素の元素記号を記述する」(県比-12.5、全国比-16.3%)

3. (1) ウェルビーイングの視点から 小学校児童質問紙より

①自己肯定感を涵養する教育の推進に係る取組の評価 学校教育に視点

		R 6	R 7
幸福感	紀宝町	7.87	8.13
	全国	7.81	7.98
	差	0.06	0.15
学校や地域でのつながり	紀宝町	8.14	8.88
	全国	8.38	8.46
	差	0.24	0.42
協働性	紀宝町	7.38	7.90
	全国	7.58	7.61
	差	0.20	0.29
利他性	紀宝町	8.65	8.85
	全国	8.65	8.77
	差	0.00	0.08
多様性への理解	紀宝町	6.49	7.34
	全国	6.68	6.86
	差	0.19	0.48
サポートを受けられる環境	紀宝町	7.05	7.81
	全国	7.27	7.47
	差	0.22	0.34
社会貢献意識	紀宝町	7.34	6.76
	全国	7.22	7.02
	差	0.12	0.26
自己肯定感	紀宝町	6.36	6.93
	全国	7.40	7.67
	差	1.04	0.74
自己実現	紀宝町	7.78	7.76
	全国	7.84	7.91
	差	0.06	0.15
心身の健康	紀宝町	7.74	7.71
	全国	7.96	7.94
	差	0.22	0.23
合計	紀宝町	74.80	78.07
	全国	76.79	77.69
	差	1.99	0.38



児童質問紙の中で例えば、学校や地域でのつながりの要素として「友達関係に満足していますか」では、「あてはまる」と回答した人は 72.5% (全国比+8.3%) であり「どちらかと言うと当てはまる」をいれると 96.3% (全国比+4.6%) でした。

また、多様性への理解の要素である「自分と違う意見について考えることは楽しいと思いますか」については「あてはまる」と回答した人は 36.3% (全国比+4.7%) 「どちらかといえばあてはまる」と回答した人は 50% (全国比+4.5%) でした。

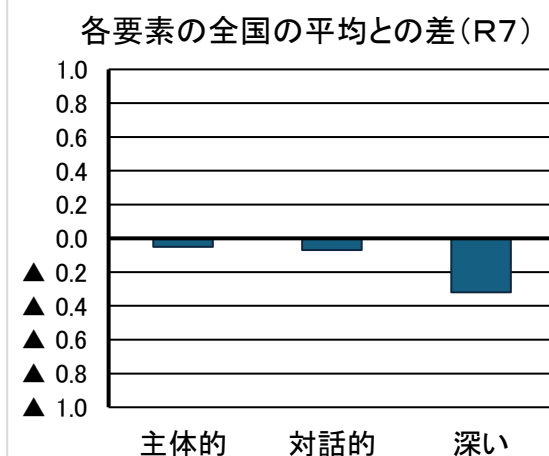
このことから、学校生活や授業では仲間と楽しく協働し取り組めていることがうかがえます。

自己肯定感においては若干低いと感じますが、ほとんどの項目で大変高い評価が出ており、ウェルビーイング (幸福度) にむかう子どもたちの取組が高まっていることがわかります。

3. (2) ウェルビーイングの視点から 小学校児童質問紙より

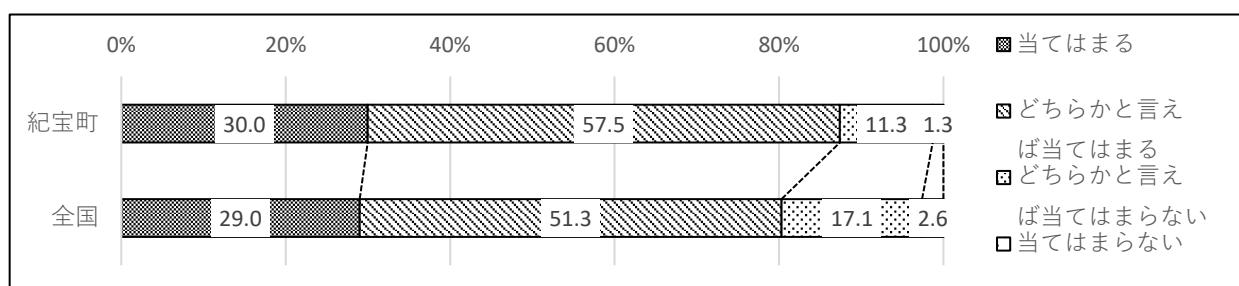
②自己肯定感を涵養する教育の推進に係る取組の評価 授業に視点

		R 6	R 7
主体的な 学び	紀宝町	6.67	→ 6.89
	全国	6.96	6.94
	差	0.29	→ 0.05
対話的な 学び	紀宝町	6.76	6.75
	全国	6.81	6.82
	差	0.05	→ 0.07
深い学び	紀宝町	6.62	→ 6.65
	全国	7.05	6.97
	差	0.43	0.32
合計	紀宝町	20.05	→ 20.29
	全国	20.82	20.73
	差	0.77	0.44



主に授業に係る要素が多くなりますが、どの項目評価も比較的高く、いくつかの項目で大変高い評価があり、子どもたちが前向きに取り組んでいることが推察されます。それでは具体的な例をみていきましょう。

「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」(主体的)



対話的な学びの要素として「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」については、「当てはまる」33.8%、(全国比+7.1%)「どちらかと言うと当てはまる」50%。(全国比+6%)、肯定的回答 88.3% (全国比+0.1%)

友だちの意見を聴くのは楽しいが、そこから新たな考えに気づき、深めることができるという領域に入っていると考えます。

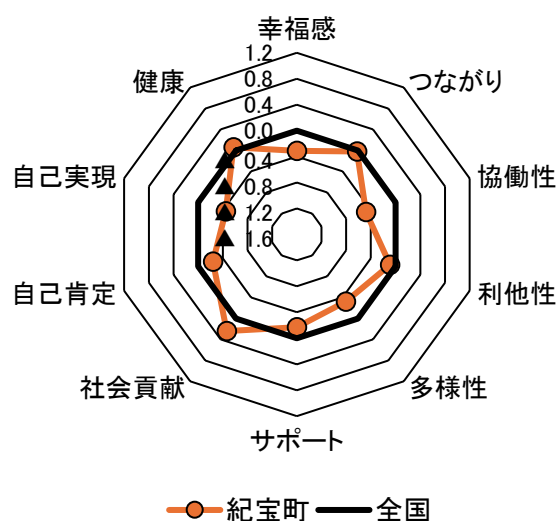
深い学びの要素として「5年生までに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」では、「当てはまる」が21.3% (全国比+7.4%)、「どちらかと言うと当てはまる」が58.8% (全国比+9.7%) 肯定的な回答では80.1% (全国比+2.3%) でした。

3. (3) ウェルビーイングの視点から 中学校生徒質問紙より

①自己肯定感を涵養する教育の推進に係る取組の評価 学校教育に視点

		R 6	R 7
幸福感	紀宝町	8.06	7.44
	全国	7.58	7.75
	差	0.48	0.31
学校や地域でのつながり	紀宝町	8.81	8.17
	全国	8.08	8.19
	差	0.73	→ 0.02
協働性	紀宝町	7.89	6.99
	全国	7.58	7.47
	差	0.31	0.48
利他性	紀宝町	8.64	8.42
	全国	8.45	8.51
	差	0.19	→0.09
多様性への理解	紀宝町	7.86	6.58
	全国	6.71	6.90
	差	1.15	0.32
サポートを受けられる環境	紀宝町	7.20	7.03
	全国	7.05	7.20
	差	0.15	0.17
社会貢献意識	紀宝町	7.31	6.63
	全国	6.56	6.39
	差	0.75	→ 0.24
自己肯定感	紀宝町	7.31	7.21
	全国	7.29	7.45
	差	0.02	0.24
自己実現	紀宝町	6.61	5.96
	全国	6.31	6.41
	差	0.30	0.45
心身の健康	紀宝町	7.99	8.12
	全国	7.72	8.06
	差	0.27	→ 0.06
合計	紀宝町	77.68	72.55
	全国	73.33	74.33
	差	4.35	1.78

各要素の全国の平均との差(R7)



「地域とのつながり」や「利他性」「サポートを受けられる環境」の評価の割合は比較的高く、「社会貢献意識」と「心身の健康」では大変高い評価でした。

また、「協働性」と「自己実現」の項目では、やや評価の割合は低い結果が出ました。幸福度は比較するものではないという認識に変わりはありませんが、「生きる力」を育てるという観点では「学力との一体化」において分析が必要です。

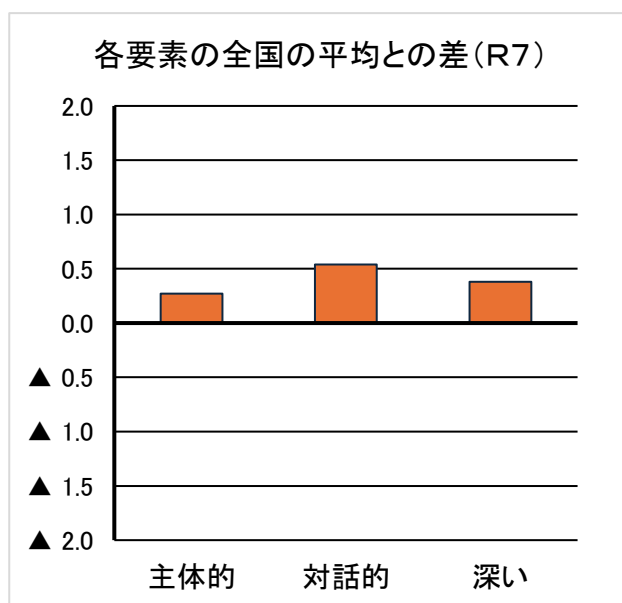
具体的には「授業や学校生活で友達や周りの人の考えを大切にしてお互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか」(協働性)や「将来の夢や目標をもっていますか」(自己実現)があげられます。

学校生活や授業の中で「協働性」や「自己実現」について不安感があると考え事も多くなり、仲間との信頼関係を構築していくことが難しい状況となります。

しかし、これらの要素は学校生活の経験や体験で変わっていくものですから、学校カリキュラムの中で、いつ、どういった時期に適切な取組を行うかということも大切だと考えます。

3. (4) ウェルビーイングの視点から 中学校生徒質問紙より ②自己肯定感を涵養する教育の推進に係る取組の評価 授業に視点

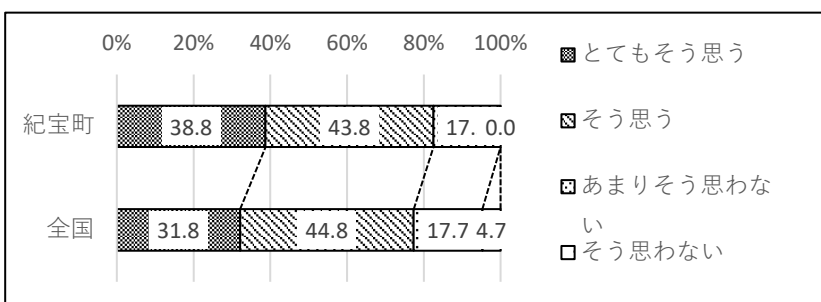
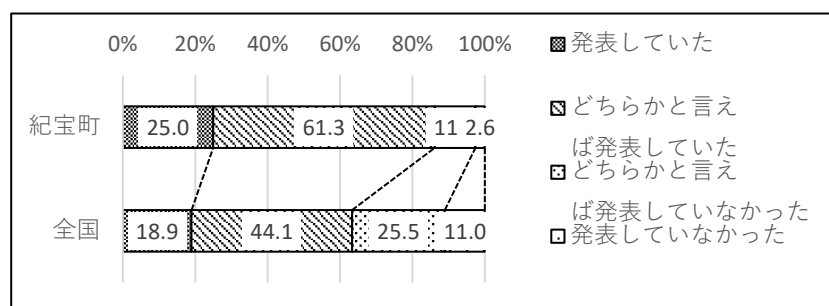
		R 6	R 7
主体的な 学び	紀宝町	7.20	6.83
	全国	6.77	6.56
	差	0.43	0.27
対話的な 学び	紀宝町	7.19	6.97
	全国	6.56	6.43
	差	0.63	0.54
深い学び	紀宝町	7.04	6.68
	全国	6.63	6.30
	差	0.41	0.38
合計	紀宝町	21.43	20.48
	全国	19.96	19.29
	差	1.47	1.19



左表（主に授業での学び）では、評価が全国を上回る項目が多くみられました。主体的・対話的・深い学び、すべての要素で高い評価でした。

「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」（対話的）

対話的な学びの要素が非常に高い評価でした。また、深い学びの要素である「授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思いますか」では「あてはまる」が 27.5%（全国比＋4.0%）「どちらかと言えば当てはまる」が 53.8%（全国比＋2%）でした。右の表はPCやタブレットでプレゼンテーションができますかという質問ですが、非常に高い評価でした。

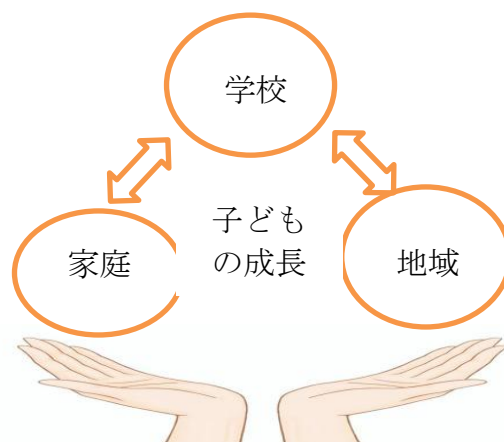


自分で発表をしたり、仲間の発表を聴いたりすることで、主体的・対話的・深い学びが育っている事が分かります。

4. 学校・家庭・地域が連携した「地域とともに学ぶ」学校を視点とした、教育委員会がこれからも大切にしたいこと

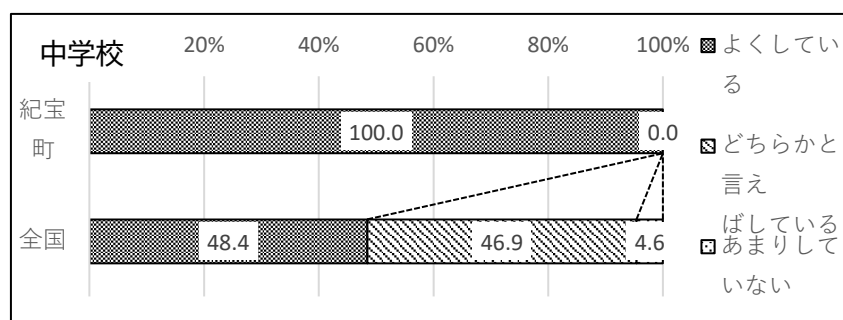
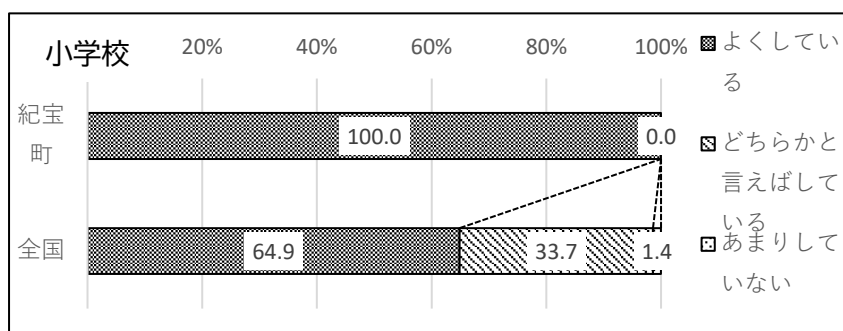
子どもたちの「学びの向上」は、学校・家庭・地域が連携し、一体となって推進することで効果を発揮し、ウェルビーイング(幸福度)を育くむことと「学力向上」の一体化につながると考えます。

ここでは、おもに学校質問紙から見える学校の取組について、教育委員会が学校・家庭・地域と連携し、大切にしていきたいことを挙げました。家庭、地域の皆様には引き続き子どもの学びについて協働していただきますようお願い致します。



(1) 授業実践について大切にしたいこと

「あなたの学校では、授業研究や事例研究等、実践的な研修を行っていますか」(学校質問紙)



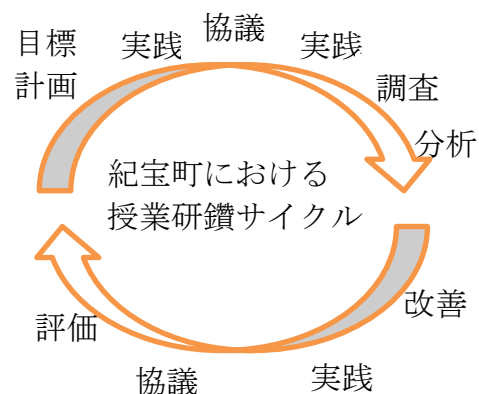
紀宝町内の小中学校では教職員の計画的な研修が行われていることに対して各学校が「よくしている」と100%回答しています。

また、小学校において子どもたちが「熱意をもって勉強している」の質問に「している」と80%回答していることに、教職員集団の情熱を感じます。

子どもたちにとっても、授業の中で「わかった!」といえるときが「学び」を大

きく進化させると考え、紀宝町では目標・計画→授業実践→調査→分析・確認→工夫・改善→評価→新たな目標・計画の研鑽サイクルが確立され、学校間の情報共有、意見交換のもと、実践がつながり、今日までその取組が積み上げられてきました。

今後も、これまでの取組をベースに、研修を深め、質の高い授業を子どもたちに提供できるよう支援します。また、本年度より小規模小学校の算数教科においてクラスを分けて少人数授業を行う「わかる授業」に取り組んでいます。

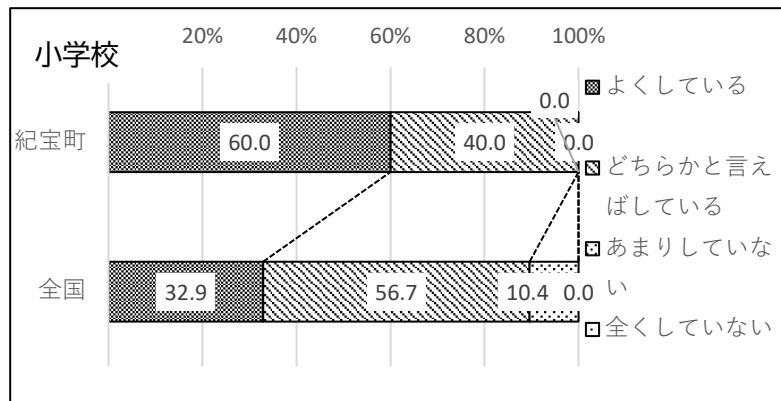


(2) 教職員の研修等で大切にしたいこと（学校と教委の連携）

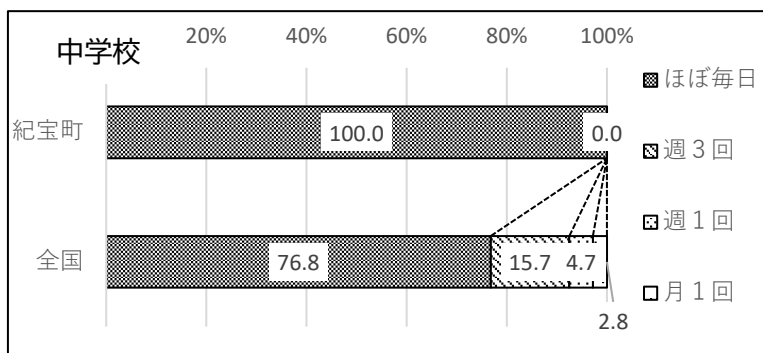
右図のように小学校では研修を「よくしている」と回答した学校が60%にのびります。教育委員会では今後も、学校間の情報共有、意見交流を図り、取組の改善を継続していきます。

また、大学教授や県から講師を招聘し、様々な研修の開催や中能登町との視察交流等、学校の研修サイクルがより深まるよう推進します。

「個々の教員が自らの専門性を高めるため、校外の各教科等の教育に関する研究会等に定期的・継続的に参加していますか」



「前年度に、教員が大型提示装置等（プロジェクター、電子黒板等）の ICT 機器を活用した授業を1クラス当たりどの程度行いましたか」



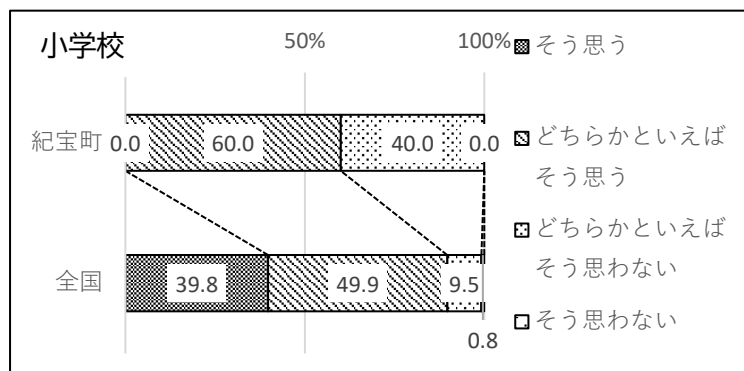
紀宝町では大型電子黒板をR4年に導入して以来、一人一台タブレットと併せてICT機器を活用した授業が積極的に展開されています。

中学校の授業では1日のうちに複数回 ICT 機器を使用するが47.5%（全国比+18%）、1回は使用するが31.3%（全国比+7.6%）、と非常に高い割合です。

小学校では子どもたちは「1日複数回 ICT 機器を使用している」が80%の割合で回答しています。

学校質問紙では、左表のように十分なサポート面については「そう思う」が0%の回答になっていることから今後はICT機器による質の高い授業に向けた教職員の研修会やその内容について検証した上で必要に応じ取り組みたいと考えます。

コンピュータなどのICT機器の活用に関して、学校内外において十分に必要なサポートが受けられていますか

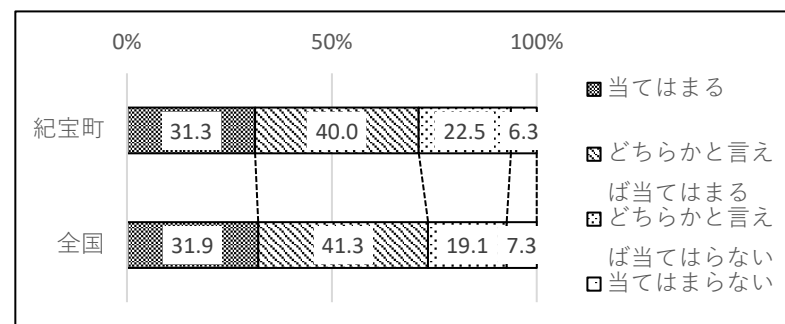
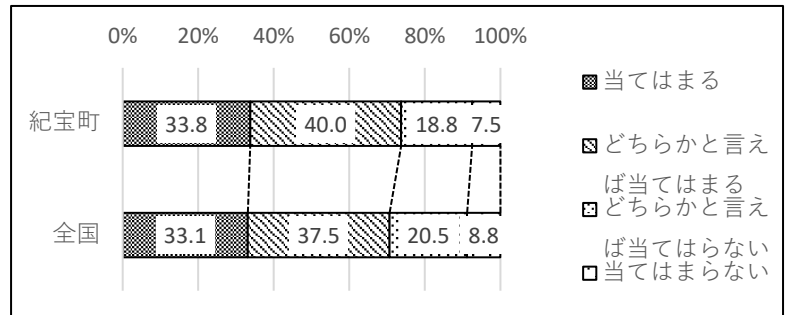


(3) 学校と地域の連携で大切にしたいこと

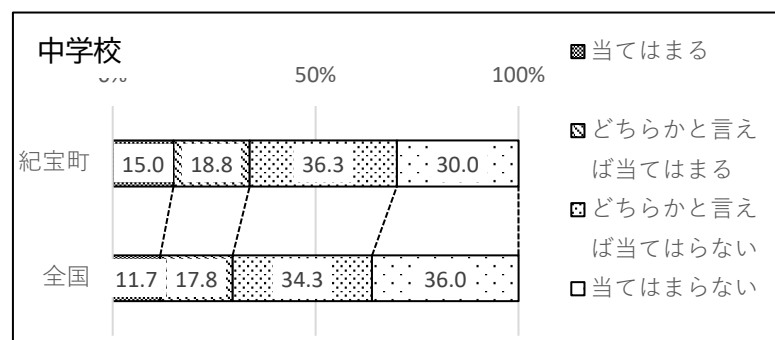
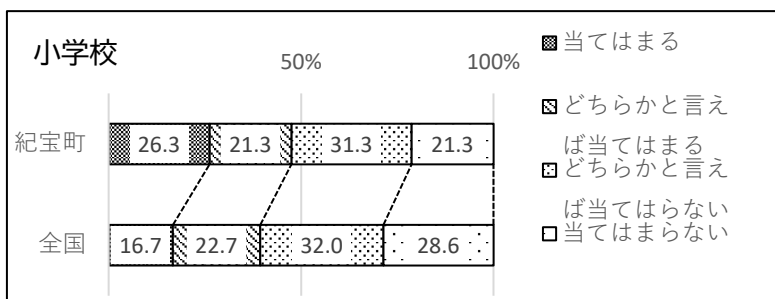
「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」

紀宝町では昨年度より「学校に登校しない」「登校できない」「登校できるが教室へは入れない」子どもたちに向けて校内教育支援センターを立ち上げました。SC、SSW と連携し、教育相談やケース会議も行っています。

学校生活をより良くするための「QU テスト」等も学校の要望に応じ提供しています。子どもたちが安心して過ごせる教育環境づくりにこれからも取り組んでいきます。



「地域の大人に、授業や放課後などで勉強やスポーツ、体験活動に関わってもらったり、一緒に遊んでもらったりすることがありますか」(習い事は除く。児童生徒質問紙より)



紀宝町では「コミュニティ・スクール等の仕組みを活用して、保護者や地域住民の意見を学校運営に反映していますか」という学校質問紙では小中とも「活用し反映している」が100%でした。

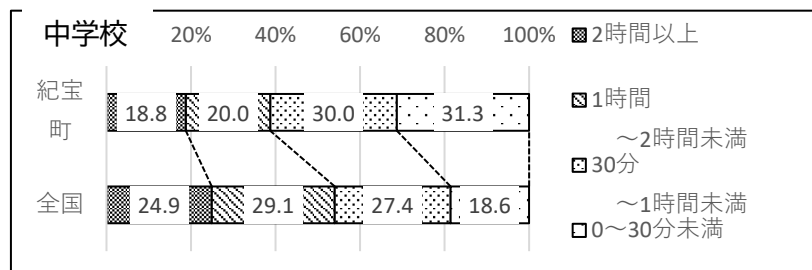
各小中学校では学校運営協議会の委員や元気キッズからの地域人材によって素晴らしい授業を展開していただいています。

また、サマースクールでは地域人材の支援を受け、各小学校を会場に子どもの主体的な活動に取り組んでいます。

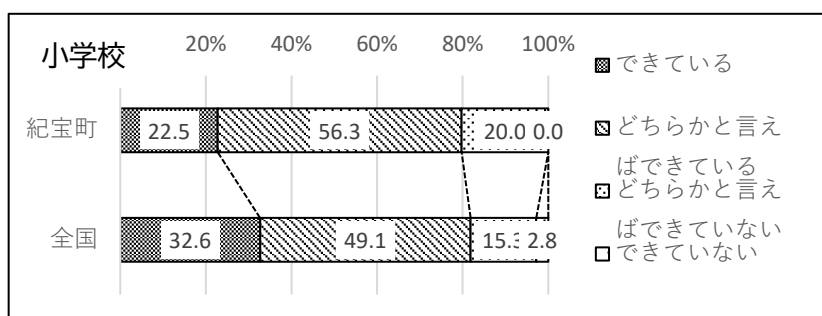
子どもの質問紙では、わたくしたちが考えるよりも肯定的な回答が低いように感じます。地域とつながっていることをしっかりと伝え、「当てはまる」と回答する子がもっと多くなるように今後とも「地域とともに学ぶ」を目指します。

(4) 学校と家庭の連携で大切にしたいこと

「学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」(塾、SNSによる学習含む)



「分からないことやくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」

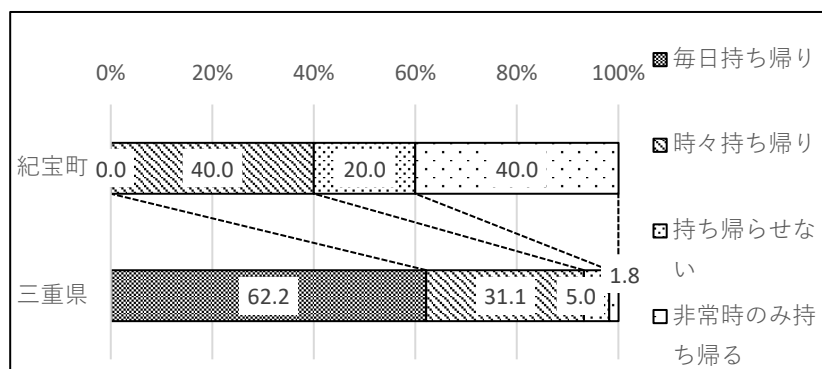


主体的な学びにおいては、学校では仲間と協働し、対話することで取り組むことができますが、家庭学習においては①自分で知りたいと思うことを工夫しながら学ぶことができる。②自分の趣味や没頭することがありそこにもっと知識が必要とわかっている。③毎日、家庭で教えてもらえる環境がある。④「スポーツで勝ちたい」、「あの高校に行きたい」という目標ができる等、いくつかの要素がある場合、家庭で主体的に学ぶことが考えられます。宿題や課題となると「やらされ感」を感じるかもしれません。教育委員会でも年度初めに「学習のすすめ」について学校を通じて配布し、家庭での学習方法を具体的に

提示しているところです。

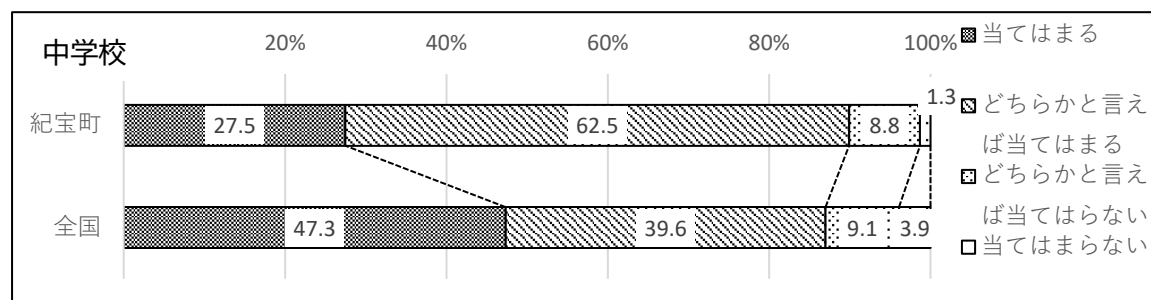
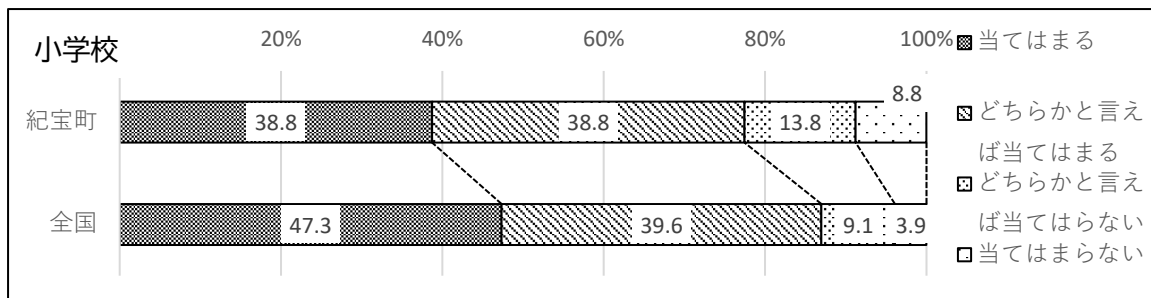
対話的と言うことであれば、ICTの活用は有効だと考えます。今後、学校とともに主体的・対話的で深い学びに向かう子どもたちへのアプローチについて検証し、必要性が高いならば、取組を推進していきたいと考えます。

「児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどの端末を、どの程度家庭で利用できるようにしていますか」



(5) 学校・家庭・地域の連携で大切にしたいこと

「自分には、よいところがあると思いますか」



自己肯定感に関する児童・生徒質問紙では、全国と比較すると例年本町の子どもたちの回答は低い傾向にあります。幸福度の要素である自己肯定感等は決して他の人と比較するものではありませんが、子どもたちの考えを知り、自己肯定感を高めていくことの大切さは言うまでもありません。

①子どもたちが「80%ぐらい満たしていないと良いとは言えない」と考えるのか、②「今、身につけている良いところと捉えるのではなく、その時の気持ちで判断しているのか」それとも、③「良いという定義の振り返りにおいて自分自身で厳しい評価をするのか」④「自己に対して誰かと比較し、自信が持てないのか」

わたしたちは、これからも子どもたちの自己肯定感を促すために、「①お互いに挨拶をする。②相手の話をよく聴く。そして話す。③小さなことでも正しいこと、行動したことを認める。④お互いに感謝の気持ちを伝える。⑤夢中になることを応援する。」を学校・家庭・地域すべての場面で大切にしていきたいと考えます。

(6) 家庭と教委の連携で大切にしたいこと

最後に、児童・生徒質問紙の回答では、「毎日朝食を食べていますか」「毎日同じくらいの時間に就寝・起床していますか」について、肯定的な回答が大変高い割合であることにつきまして、保護者の皆様に感謝申し上げます。現在において決してあたりまえでない、一番大切な項目だと考えております。

